

江川せせらぎ物語

田辺 勝義

プロローグ 「地下貯留管構想」の浮上

遙か昔、江川は巖川の名でした。それが二ヶ領用水と矢上川を繋ぐ分流として改築されて江川となり、橘樹郡稲毛領の新しい庄(新域)から古代藤原氏の荘園であつた小田中を突り豊かに潤してきました。

二ヶ領用水は臨海工業地帯の工業用水として流域を繁榮させる一方、用水網は次々と下水化されていきます。江川はその中を生き残りましたが、やがてドブ川化していきます。また、樹林地、田畑の減少の結果洪水が頻発し、洪水対策の江川はコンクリート護岸化されました。

その工事に伴って、70年代には市内随一となっていた井田堤の桜並木はやむなく伐られてしまい、こども達も遊ぶ流れは単なる排水路と化しました。その桜並木は50年代に青年団が、地域を豊かにという思いで、市の許可を得て自力で植えたものでした。

工事にも関わらず、台風などの時には度々洪水が起こります。82年の井田などの大水害は多くの人の記憶に残っています。そこで浮上したのが、洪水対策のための巨大な「地下貯留管構想」でした。

桜並木とこのお話はまたの機会に。